

室内に時計の鐘の音が二度響き渡った。

鼓膜を震わせる其の鈍い音に集中が途切れ、一気に現実に引き戻される。

もつそんな時間かと改めて左の腕に巻いた時計に目をやると、確かに研究書に目を通し始めた頃合より長針が二回転している。

道理で。目も疲れている筈だ。

手にした紙の束を一旦机の上に置き、眼鏡を外して眉間を揉んだ。

知らず知らずの内に蓄積した疲労から、そして何より、知り得た知識から立て続けに溜息が洩れる。

しかし其れらを上回る充実感から、口元には笑みが浮かんでいだ。

自分の持ち得る人脈の全てを使い、苦勞して漸く入手できた其れは、其の衝撃的な内容と『忘まわし』さから欧州の学会から永久追放された、とある研究者によって書き記された研究書であった。

周囲の目を欺くためだろうか。印字された題目や署名部分はべつたりと墨塗りされている。また其れとは別に、どれ程多くの人の手に渡り読まれてきたのか、擦り切れ、読めなくなっている箇所も幾つか見受けられた。辛うじて読み取れる署名の綴りから察すると、著者は独逸人か、独逸系移民のようだった。

十八世紀末、伊の医学者ルイジ・カルヴァーニが蛙の足を用いて行った実験。其れを基礎とした数々の実験を踏まえた上で新たな生命体を作り出すことを最終目標に掲げた其の研究書には、素材の使用部位を始めとして、筋肉や神経各所に配置した電極数、そして各部位の反応や反射を引き出すのに

必要な電圧量といった具体的数値までが詳細に綴られていた。

しかし内容自体は非常に充実しているものの、実験の過程や被検体の入手経路も含めて、『本物の人間の遺体を使用した』ということが何よりも問題視されたい。こんなご時勢だ、実際にそういった実験を行った科学者は彼の他にも無論存在したのだから、流石に表面上は取り繕っていただろうし、学会もまた其れを暗黙の了解としていた筈だ。だがこつも堂々と明確な文体で記されては流石の彼らにも底いよつが無く、結果、其の研究内容が学会に与えた影響力を考慮に入れても、著者を追放せざるを得なかつたのだらう。

無論、著者がこの研究書を記す以前にも、例えば『人体の電気についての研究書』、『電気についての書簡』、或いは『ガルヴァニスムについての理論及び実験の小論』といった、人間を対象とした実験結果を記した数多くの研究書が学会に提出されている。しかし肝心の内容はといえば、どれもこれも筋肉各所に微弱な静電気を流して其の結果を纏めたというものばかりで、強力な電流を用いて死せし肉体の蘇生を試みるというような見込めのあるものなど、何一つとして存在しなかつた。

『人道的に許されない』。其れが其の理由であり、また実際に其の領域に手を出した著者が異端視された理由でもあつた。

だが此処に記されている実験と明確な理論は、読む者に一切の躊躇や無駄を感じさせず。あらゆる倫理を超越した観念、或いは志から、迷う事無く執り行われたに違いないと思わせるに充分なものであつた。

しかし人道的見地を別としても、此の研究書自体はこれから自分が取り掛かろうとしている計画に

於いて充分過ぎるほど参考となり得る情報であつたし、何より、其の忌まわしい行いを国家規模で実現しようとする計画を立てている自分に、人情家気取りであれこれと批評する資格があるだろうか。そんなもの、端からありはしないのだ。

寧ろ、彼よりも尚世の謗りを受けるかもしれない。

否、あの計画が実現した暁には間違ひなくそうなるだろう。そう思つたところで、何ともいえない笑みが浮かんだ。

しかし有用性が高いと判断出来るなら、其れが如何に非人道的な手段であろうとも、また如何に怪しげな情報であろうとも、何一つとして見逃すつもりは無い。我が国が他国の侵略を受けずに生き抜いていくためには、何とんでもあの計画を推し進めていかなばならないのだ。たとえどのように罵られることになろうとも、全ては覚悟の上だ。

幾度目かの決意を胸に秘めながら片手で頁を捲り、再び文面に目を走らせる。

此の偉大なる実験を成し遂げた研究者は、此の研究書を完成させた僅かの後に行方知れずとなり、風の噂によると遙か北極の海に消えてしまつたらしい、との報告が為されている。真偽の程は定かではないが、生きてはいないことだけは確実だつた。何せ、優に百年も昔の人物だ。若し生きていたとしたら、彼は彼が作るつとしたモノに負けず劣らずな化け物だろう。

頁を戻し、癖のついた表紙を手の平で撫ぜる。

此の研究書の入手は、我が軍きつての秘密将校ですら困難を極めた任務だつたと聞いている。欧州戦争がひと段落着いたばかりで殺気立つ各国の情報収集に忙殺されているだろう最中、自分の個人的

な依頼を叶えるために優秀な部下の時間を割くことを了承してくれた参謀本部長には、後で何らかの形で礼をせねばなるまい。

……それにしても。

再び紙面をざつと眺め、溜息をついた。

……出来ることなら、彼と直に会って、詳しい話を聞いてみたかった。

今となっては叶わぬ望みとなつてしまつたが、もし其れが可能であつたならば、自分の計画はより具体性と現実味を伴つて、亜細亜圏の中で唯一確固たる独立性を持ちながらも常に列強諸國の脅威に晒され続けている我が大日本帝国だけではなく、独立を目指す全ての國々の助けとなつたことだろつ。繰り返し繰り返し彼の死を嘆かずにはおれないほど、此の研究書は素晴らしいものだった。

題目や署名が黒塗りされている割には、肝心の中身がほぼ完璧に近い形で無事であつたことを意外に思つたが、実際に目を通して見た我が身に照らし合わせて考えてみれば成る程、良く判る。

これを目にした科学者たちは、各々の倫理や宗教観から諸手を挙げて賛辞を送るわけにはいかなかつたものの、一人の科学者としての観点から、人類史上例を見ない資料となるだろつ此の研究書を、学会の命令にただ従つて闇に葬り去る手伝いをするのが忍びなかつたのだろつ。現に新旧、或いは国教会などの各宗派やその他多くの組織から大弾圧を受けただろつにも関わらず、遙か大陸を渡り海すら越えて、これは今、極東の島國に住む自分の手にこつして渡つてきたのだ。

予想を超える完成度の高さから、読み進めるにつれて年甲斐も無く高鳴つてしまつていた鼓動を手で軽く抑え、深く呼吸した。

一通り落ち着いたところで、さて茶でも淹れさせて一服しようかと卓上に設置された電話機に手をかざしかけた其の時、窓の外に何者かの気配を察し、身を強張らせた。

誰だ。

一階であるならいざ知らず、自分の執務室は二階にあることに加え、近年世界各国で開発目覚ましい長距離用射撃銃の的とされないよう、枝振りの豊かな背の高い樹木が窓を遮るようにならしている。

常識的に考えれば、此の執務室の窓の外から気配を察するものといえは野鳥か鳥、鳩或いは雀の類しか居ない筈なのだが、其れでも先程感じたものは『何か』が違った。そう、其れは鳥や動物には決して持ち得ない、『明確な』意志の存在。

外していた眼鏡をかけ、机上に置いていた研究書を他の機密書類と共に鍵の付いた引き出しに仕舞い、施錠する。入れ違いに別の引き出しから護身用の小型拳銃を取り出し、手の平の内に包み込んで何気ない風を装って席を立つ。急所をかばいつつ、自然な足取りで窓辺に近づいた。

一気に分厚い窓掛けを引き、大きな音を立てて窓硝子を開く。

そして、其の先で目にしたものに、絶句した。

「……君か、」

身体から力が抜け、次いで溜息交じりの声が漏れ出た。

相手の方とはというところ、そんな自分の反応など一向に気にしていない素振り、飄々と挨拶を口にし始めた。

「嗚呼、これはどうも閣下。気付かれましたか」

いや参つたな。お手を煩わせるのもどうかと思つて、これでも一応氣を遣つていたのですが。見付かつてしまいましたか。

数年前前からある場所で幾度か顔を合せている此の男は、風紀に敵しい軍内にあつては珍しく、耳まで覆う茶色がかつた長髪に少々色の薄い瞳をした、整つた目鼻立ちの持ち主だつた。只でさえ目立つだろう其の容貌に加え、群を抜いた長身でもある彼は、今は其のしなやかな身体を豊かに生い茂る木々の枝にゆつたりと預け、うつんどうしよう、と呟きながら頭を搔いていた。

銃口を間近に向けられておきながら、尚も呑気な態度を覆さない彼の、線の細い外見にそぐわぬ中身の凶太さといつものをひしひしと感じさせる回答に呆れ返り、其れまで構えたままだつた自らの腕をゆるりと下ろした。

「……何をして居るのかね」

撃鉄を下ろし、彼の捻捻を耳にした時から俄かに訴えだした頭痛を抑えるため、米神に指を当てる。

「何を、と仰られましても。まあご覧の通りですとしか自分には答えようが無いのですが」
軍帽から僅かに覗いているくせつ毛を指先でいじりながら彼は答えた。

任務完了の報告をせんと、はるばる参謀本部まで来たのはいいのですけれども。……肝心の上官が只今公議の真つ最中らしくつて。

「終わるまで待機せよと、素氣無く追ひ返されてしまいましたので、休憩がてらにちよつとした息抜きをさせて頂いていた次第です」

此処数ヶ月の間姿を見せないと思つていたら、どつやら何がしかの任務に就いていたらしい。

至つて素面で、肩を疎めんばかりに気軽く締め括られた彼の回答に、先程から感じていた頭痛が更に強まったのを感じた。米神に当てていた指に力を入れ、揉み解しながらゆつくりと問いかける。

「……応接室なり何なりに通されなかつたのかね」

「通されました。しかし愛想の欠片も無い警備の者達に見守られながら、殺風景な部屋で延々と時を過ごすことにも耐えられそうに無かつたので」

「どうせ一休みするならと、こうして逃亡してきたわけです。」

「……そんな所で、」

「こんな所で、」

長身ではあるが、しかし夜目で見ても判るほどに細く、すらりと伸びた体格をしている彼は、恐らく通常の成年男子よりも随分と目方が軽いのだろう。だからこそ、このような細い枝に身を任せることが可能だったのだろうが、しかし、……それにしたつて。

「ずれた返答を口にし続ける彼にすっかり毒気を抜かれた。」

本来であれば自分は彼の行為を戒め、罰を与えねばならない立場にあるのだが、かといってこの中間の抜けた空気では叱咤することも出来ず、随分と場違いな行為であるとは分かっているながらも、止むを得ず、何時も彼処で交わすよつな調子で会話を続けることにした。

「……高さが恐ろしくは無いのかね」

西洋の建築方式で建てられた此の建造物は、一階とはいえ侮れない高さを誇る。お世辞にも骨太とは言えない彼だ、下手に墜落すれば骨折は免れないだろう。

そんな自分の心配を他所に、彼は一向に分かつていない面持ちのまま平然と答えた。

「いいえ全く。寧ろすこぶる快適です。少なくとも、自分にとっては」

微風が枝葉を揺らしながらそよそよと二人の間を吹き抜けた。

そうして自分達の間には横たわった沈黙に流石に何か思いつところがあつたのか、幾分慌てた様子で彼は続けた。

「いやまあ、その。別に其処で待つても良かったんですがね。警護の任に就く連中の内一人から向けられる視線が、どうにもその、自分には。……お察しください閣下」

軍帽の鍔をちよいと引き下ろし苦笑した彼が暗に匂わした内容に、成る程など得心した。

皆まで言われずとも、自分もまた幼少の頃より軍一筋に生きてきた男だ。何時もは冷静、且つ明確な言葉や答えを寄越す彼が珍しく言葉を濁した其の先を察し、成る程と答えてやれば、彼はほつとした笑顔を浮かべて鍔を引き上げ、小さく敬礼した。

元々、実年齢の割には幼い顔立ちをしている彼がそんな表情を浮かべると、妙に可愛らしい印象を受ける。何時も顔を合わせる夜間と違い、今は珍しく日の下で相對している分、より明確に其の面が見えるので、尚更其の印象は強まった。

□元に笑みを浮かべながら、しかし同時に態とらしい鬨め面を向けて口を開く。

「……慣れた君は其れでもいいのだろうが、しかし、見ている私としてはどうにも落ち着かない。

人目に付くところで休むのが厭だと言つのなら、私の部屋に来て休みなさい。仮眠用の寝台もある」
自分の申し出を聞いた彼は、目を丸くして驚いていた。ぱちぱちという音が聞こえそうな程に長い

彼の両瞳が上下に動く。

「……しかし、」

「心配無用。私は家内一筋だ」

「は……、いえ、とんでもない。自分は園下に対しそのような類の危機感を抱いたわけでは」

瞬時に我に返り、戸惑ったような口調で口にした彼の反論を、更に封じ込める形で畳み掛けて口によれば、彼は慌てて手を振り弁解した。

随分と焦った様子の彼を可笑しく思い、口調を緩める。そうして尚も辞退し続ける彼を促す言葉を添えた。

「構わん。左官である君なら、警護の者に行く手を遮られることもないだろう。いいから、……そんなところで問答している暇があるなら、早く降りてこちらに来たまえ」

慣れた君は快適で良いのかもしれないが、先程から其れを見ているこちらとしては、君が何時か落っこちるんじゃないかと、先程から随分と冷や冷やしているのだ。

「……あまり年寄りを脅かすものじゃない」

苦笑を浮かべ、穏やかにそつ締め括った自分の言葉に、漸く納得したのか。彼は軍帽の鏢に手をかけ、軽く引き下げながら頷いた。

少し照れたような仕草を好ましく思う。

其の後徐に身を乗り出しかけた彼の体勢に、慌てて言葉を添える。

「こら、面倒だからといって窓から入るんじゃない。部屋は分かるね、警備の者にも話は通してお

くから、ちゃんと扉から入りなさい」

我ながら子供に対する説教のよつな科白だったが、其れに対して怒るわけでもなく彼はただ軽く肩を竦め、了解しましたと呟いて、するするする、と見事な体捌きで木を伝い降りていった。

窓から身を僅かに乗り出して彼が無事地面に到達したのを確認し、念を押してよかつたと安堵の息をついた。

木の上から突如姿を現した彼の姿を目に留めた警備兵が、目を丸くしているのが見える。しかし彼らを驚かせた当の本人は、肝を冷やし続けたこちらの気も知らず、慌てふためく警備兵の敬礼も気に留めず、軍帽の鍔に手をかけ、小さく引き上げた後に建造物の入り口方面へすたすたと歩いて行った。

「……やれやれ」

仕様の無い子だ。

周りをいよいよ振り回しておいて、全く悪びれる様子の無い彼の後姿を眺めているうちに、つい苦笑が洩れた。

しかし、のんびりしてもいられない。歓迎すべき客人がやって来るのは実に何ヶ月ぶりだろうか。自分と同じ年頃の、枯れ果てた老人が相手であるならば茶の一杯で構わないだろうが、彼は若い。そろそろ腹が空いてくる頃合だろうから、菓子の一つでも出してやらねば。

さて、何かあったかなと思ひ返しながら電話を鳴らし、人を呼んだ。

「……それにしても」

「はい」

絵皿に乗った金色のカステラを小さなフォークでつつきながらきよとんと目を瞬いている。其の
一見するとただ可愛らしいだけの彼の仕草に誤魔化されることなく、続ける。

「若し私以外の者に見つかっていたらどうするつもりだったのかね」

「嗚呼、そんなことですか」

「そんなことって……君ね」

軽くあしらう口振りに眉を寄せるが、彼はそんな自分の反応を気にもかけずに黄色い生地をぱくりと一口頬張って、あっけらかんと続けた。

「心配御無用です」

自分の気配に気付くことができたのは、後にも先にも閣下御一人だけです。

「これでも自分は気配を消す術には自信がありますし、」

階上であることに加えて、樹木によって外部の目を遮られているという安心感もあるのか。皆さん
面白い位に油断なさっておられる。

平然と続けられた彼の科白に、弛みきった上官たちへの皮肉とも揶揄とも受け止められるにおいを
感じ取った。

「……それにしただって、」

「すいません」

いや、まさかなとカップを傾ける歳若い彼を窺める言葉を口にしかけるが、皆まで言わぬうちにすかさず頭を下げられ、次いで色の薄い目でじいと見詰められて、何故だか二の句が次げなくなつた。正に不覚としか言いようが無いが、一瞬でもたじろいでしまつたからにはこれ以上問ひ詰めるわけにもいかず、ただただ苦笑するしかなかつた。

そんな自分の反応を目にした彼は、したりと笑みを浮かべ、もそもそと手にした残りのカステラを片付け始めた。其の様子にやられたとは思ふものの、珈琲を片手に嬉しそうに黄金色の菓子に舌鼓を打っている彼の姿を眺めているうち、自然苦笑は笑みへとすり替わる。なんだ。

なんだ、矢張り腹が減つていたんじゃないか。

あの場所で話をしている時の口振りや其の仕草から、若さの割りには随分と世情に長けている様子を窺させた彼ではあつたが、しかしこういうところでは先程の自分の読み通りの年相応さを覗かせることに安堵と微笑ましさを覚え、穏やかな気分になつた。

自分の子供に何かを馳走してやる気分とは、このようなものなのだろうか。

目の前の彼を見詰めているうちにそんな思いに駆られた自分を可笑しく思つた。だが、別に構いやしないだろう。元より子の為さぬ夫婦だ。ただ自らの胸の内で思い楽しむだけなら、其の対象である彼も含めて、誰に迷惑をかけるわけでもないのだから。

其処まで考えたところでふと目を向ければ、彼の髪の間小さな葉が埋もれているのが目に止まつた。よくよく気をつけて見て取ると、先程木の上で相對した折には綺麗に撫で付けてあつた筈の髪もまた、所々ではあるが乱れてしまつている。

全く、なんて姿だ。

軍部で尊ばれるような頑強さは感じられないものの、其の姿形はすつきりとして手足も長く、西洋人と並んでも遜色無い程立派であるのに、其れを台無しにするかのような農村のやんちゃ坊主もかくやと思わせる彼の行状に、苦笑混じりの溜息が漏れた。

大方、降りる際に掠めた枝から潜り込んだのだろう。

「……中佐」

改まった声を聞きつけ、傾けていたカップを置いて視線を向けてくる彼を驚かせないように、ゆっくりと其の頭部へ腕を伸ばす。

「動くなよ。……葉がついている。……そら、これだ」

自分が動いたと同時に僅かに身を固くした彼の様子に全く気付いていない風を装い、そのまま伸ばした指先で長髪にもぐりこんだ葉を探り取った。証拠物件提示とばかりに小さな緑葉を手の平に乗せて見せてやれば、彼はきよんとした面持ちで、自分の手の平と顔を交互に見詰めた。

「折角の色男が台無しだ。もうこつこつすることはするんじゃないぞ」

そつ擲掬われたことにより、己が行いと歳を省みて流石に羞恥を覚えたのか。

ありがとございませう、と心なしが気恥すかしそつに謝礼を述べた彼の顔つきは、夜間に会い見える折に時として目にするもののある冷めた其れとはすつかり異なり、随分と幼いものを感じさせた。

微笑ましさに目を細めながら見詰め返すと、すつかり照れてしまったらしい。くいと軍帽の鰐を引き下ろし顔を隠してしまった彼の、意外に青さを感じさせる反応に更に笑みを誘われ、遂には声を出

して笑ってしまった。

黄金色のカステラ二切れをべろりと平らげ、腹がくちて満足したのか。彼は「機嫌な表情を浮かべながらも時折其の目に鋭い光を浮かび上がらせ、さり気無く自分の執務室内を観察しているようだった。目端の利く自分ですら、よくよく見て取らねば気付かないほどの自然な仕草でそういつたことをさらりとやってのける彼の技量には前々から気付いてはいたが、こつした場で改めて其れを目にするとはとほと感心させられる。

彼自身の言葉を信用するなら、確が未だ二十の半ばに届くか否かといった場合であつたと思つのだが、流石に其の若さで左官になるだけはあると思わせるものを、彼は確かに持つているようだった。

……しかしどうにも。

いたく感心すると共に咄嗟に連想してしまつたものに、つい笑いがこみ上げる。

『引つ搔かれたりはするまいか。』

今のような初めて招き入れられた室内を警戒するが如き仕草に加え、先程髪に手を伸ばした折に抱いた、まるで人に懐かぬ野生動物に相對した時に感じる類の懸念を思い出した。

しかし即座に一蹴する。

莫迦莫迦しい。彼は確固たる人間であり、獣ではない。ましてや帝国陸軍に属する者だ。無闇矢鱈と牙を剥いて噛み付くような真似など、するわけがない。

全く何を考えているのだと自らにそう言い聞かせ、苦笑を浮かべた。

突然微笑んだ自分を不思議そうに見遣る彼を、軽く首を振ることで躲す。

そしてそのまま、彼を驚かせないよう先程と同じく細心の注意を払いながら、静かに、ゆるりと手を伸ばし、帽子越しに其の頭をゆつくりと撫でた。

例の如く僅かの警戒心を覗かせながら自分の手の行方を目で追っていた彼は、其の思わぬ成り行きに驚愕したのか。誰の目から見ても分かるほどにびくりと身体を震わせた後、完全に硬直してしまった。次いで、男子にしては随分と長い睫に縁取られた目を忙しなく瞬き、居心地悪そうに身動きした。

目を彷徨わせ、身の置き所に困つたような、とるべき態度に悩んでいるような珍しい彼の様子に態と気付かぬ振りで、構わずそのまま撫で続ける。

結局抵抗らしい抵抗も為さぬまま、次第に頭を垂れてゆく彼の姿を見ていて、まるで人に懐かぬ猫の仔が、とるべき態度に困り果てているようだと思つた。

嗚呼、そつだ。猫の仔だ。

自らの発想に深く頷いた。

仮にも人である彼と畜生でしかない猫を同等の位置に並べて考えるのは相当な非礼に当たると判つていながらも、両者のあまりの似通り振りに可笑しくて堪らなかつた。

いかんいかんとは思いつつも結局我慢しきれず、喉の奥で静かに笑いながら尚も彼の頭を撫で続けていると、流石に不審に思つたか。彼は遠慮がちに其の薄い唇を開いた。

「……あの、失礼ですが閣下。それほどまでに可笑しく思われるようなことを、自分は仕出かしま

したでしょうか」

戸惑い、問つてくる彼に首を振りながら構わず笑い続けた。

やれやれ、発見された時にはどうしたもんかと随分焦つちまつたが。

会議終了の報が齎され、それではと世話になつた礼を述べながら、内心密やかに胸を撫で下ろす。

……何とか誤魔化しきれたみたいで、助かつた。

他の施設や外部に居るならまだしも、自らの執務室であればいつい気が緩んでしまつのが人間というものだ。確かに、同業者を相手にする時には使えないようなあからさまな手であつたが、それでも悟られることなんて皆無であつたのに。

にこやかに微笑み首を振る彼を前に、発見された時の記憶を思い返す。

窓掛けに其の影が映つたと思つた瞬間、警戒する猶予も無く開け放たれた窓硝子。

構えられた拳銃。

眼鏡の奥に光る鋭く冷たい、眼差し。

自分と目があつた次の瞬間には霧散してしまつてはいたものの、第一線でそれなりの経験を積んできた経歴を持つ自分ですら、肝を冷やさずにはおれなかつたほどの気迫が其処には込められていた。

自分もまた此の道の玄人だ、無論、自分が何時も目にしていた一面だけがあの人の全で、なんて莫迦なことば思つてやしなかつた。だが少々油断していたとはいえ、同業者の間で特別な異名で呼ば

れるほど心配を消す術に長けている自分の存在を認知せしめるだなんて。

感心の念から内心で溜息をついた。

矢張り油断のならない人だ。

これでまた人格者としても有名なのだから全く恐れ入ると思いつながら、敬礼と共に再度礼を口にして彼の前から辞し、重厚な扉を固める警備兵に返礼して歩を進める。

数ヶ月前、直屬の上司から召集を受け、何時もの如く英国を始めとする欧州各国の情報を収集するよう命じられた折に、さり気無く伝えられた追加事項。

国内ならまだしも海外、特に欧州での調査にはひどく手がかかるのが常であるのに、其れに加えてまたお偉いさんの私情で使われるのかと、些かどころでなくうつんざりしながらも直接上官に手渡された任務ゆえ。途中で放棄することも出来ず、渋々探っている内に其の研究内容を知る機会があった。

自分もまた仮にもこんな生業に手を染めている者としてある程度の免疫は持っているつもりだったが、流石に其れに關してだけは忌まわしさのあまり背筋が薄ら寒くなったものだ。

しかし実際に手にしてみても其の具体的内容を自らの目で確認してみたところ、確かに医学的観点からいえば非常に興味深い内容であったかもしれないが、其の目的とするところ自体が到底現実味を帯びているとは思えない代物だったお陰で何とも言えず微妙な印象が強く、何だこんなものか、と些か拍子抜けしてしまつたのを今でもはつきりと覚えていて。

尤も、最近流行のオカルトにあやかつたよつな、眉唾ものの研究書のためにこき使われた訳では無かつただけましというものだろう。

これなら未だ納得がいくと自らを慰めつつ、結果として、本命の任務よりも遙かに手のかかる仕事となつてしまつた其れを土産に帰路に着いたのがおおよそひと月前の出来事だ。

そもそも、学者連中といつものはある意味自身の要求といつものに正直過ぎるほど正直なものだが、逆を言えば其れ以外のことには殆ど興味を示さないといいことでもある。任務如何に関わらず、普段相手にしている連中の気の多さには随分と辟易していたのだが、今回のことで一本気過ぎるのも考えものだといふことを学習できたのは、果たして有難いことだったのか。

誰も居ない廊下で歩を進めながら、ふう、と息を吐く。

人を疑ふことを常とする因果な商売とはいへ、こつも捻くれた人間ばかり相手にさせられては溜息だつて出ようといふものだ。

とはいへ、其れが国家に関わるような機密研究事項でも無い限り、既存の研究書に関しては割と自由に見聞させてくれる連中が多かつたので、其の点では大いに助かつた。

不審を抱かれぬよう、前以てある程度の予備知識は仕入れておいたものの、流石に専門用語は厄介で、其れに加えて文中に混じつた暗号や比喩、アナグラム等を解いていくために、芋づる式に分野外の勉強に励まねばならなくなつてしまつたのには流石に辟易した。しかし其の甲斐あつてお望みのものが入手できたのだし、また其れらの知識も決して無駄にはならないだろう類のものばかりだつたのだから、其れで良しとすべきかもしれない。

それにしても、国家間で繰り広げられる腹黒い取引の存在なんてものは疾うに承知していたわけではあるが、まさか学問といつ分野に於いてまでややこしい何かがあるらしいことには少々驚いてしま

った。

だが内容が『あれ』なら、まア判らなくもない。

帰国の際にたつた一度だけ、船室内で暇つぶしと称してきつと流し読みただけの内容を反芻した。詳しいことは理解できないまでも、其れが如何様な方法を用いて研究され、書かれたものであるか位までは理解できた。そしてあまりの胸糞の悪さに、其の日一日はソテーしたものですら、自ら率先して口にする気にはなれなかつたものだ。

基本的に詮索は好まないものの、しかし今回に限つては一体何処の物好きがあんな気色の悪いシロモノを手に入れたがつているのだかと妙に気にかかり、日本に着いて早々のうちに色々探りを入れてみたわけだが。

まさか、あの人だつたとは。

夜間目にし続けていた後姿と、其の穏やかな佇まいを思い出す。

語る口調と内容からあの人は御伽の国の住民などではなく、常に現実を見据えている人なのだと認識していた分、受けた驚きも大きかつた。

信じられないという思いからこつして態々本人に探りを入れてみたわけだが、思わぬところで肝を冷やす羽目になつた。帰国直後で疲れていたから、なんて言い訳は何の慰めにもならなかつた。

少々傷付いてしまつた矜持を密かに抱え、油断大敵だな、と自戒した。

時折敬礼を送つてくる者たちに返礼しながら、上官に宛がわれている部屋の方角に歩を進め続ける。しかし、あれの入手はあの人の個人的な依頼であつたことには間違いない、とみた方が良さそつた

った。あんな研究書を一体何に使つおつもりなのか。どうやらより具体的に調べてみる必要がありそうだなと、心の隅に留め置くことにした。

それはそつと、さつきは何かしらおかしい気分だったな。

気分を入れ替え、軍帽の端からひよこりと跳ねている髪の毛の先を摘みながら、小首を傾げた。

誰かからあんな風に触られたのは随分と久し振りだったから、動揺したのだろうか。否、百歩譲つてそつととしても、断言するには妙な違和感があった。

……そう、心の奥底で、何か小さなものが跳ねたような。身の置き所に困るような、妙にそわそわとして、落ち着かない。しかし決して不快ではない感覚。

あんなのは初めてだった。

あれは一体何だったんだらう、と再度首を傾げながらも直ぐ様思考することを放棄した。

気になることは確かだが、考えることは何時でもできる。果たした任務の事後報告を行い、さつきと正式な長期休息を取ることこそが、今の自分にとっては何よりも最重要と看做される項目だった。

「最低二週間は欲しいところだが、果たしてどうなることやら。……洋食もいけれど、やっぱり和食だよな」

また深川に押しかけてやるう。見せびらかしてやりたいものもあるし。

口では色々と言文句を言うものの、結局はなし崩し的に自分の世話を焼いてくれる変わり者の任侠の羽織姿を思い浮かべ、最早見慣れたものとなった其の苦い表情を思い出し、密やかに笑つた。

ワインやチーズにブレッドといった洋食の類は確かに好物ではあるが、其れは偶に口にすることからこ

そ良いのであつて、数ヶ月間其れしか口にしていなると流石に祖国の味が恋しくなつてくる。表立つて口にするには憚られることであるし、またそんなところから足がつくのは非常にみつともな
いと思つていたので我慢してはいるが、欧州に行く際には最低限味噌や醤油などは勿論許されるこ
となら酒肴の類まで持ち込みたいのが本音だつた。

「ま、どうせ無理だろうから言わないけど。」

口唇を動かさず、且つ周囲に聞き取れない程度の音量で緊張感の欠片も無いことを呟きながら、上
官の執務室前に立つた。顔馴染みの警備兵から敬礼を受け、小さく頷いて姿勢を正す。

「コンコン」と日本式にノックし、失礼します、と声をかけ。応えの声を確かめてから扉の把手に手
をかけ、名乗りを上げた。

「 帝国陸軍参謀本部第弐部第伍課欧米課長 篠原和晃中佐 入ります」

< X年後、筑土町金王屋地下 >

「ふはははは、どつだ葛葉我輩の研究成果は。……お前も我輩に協力したいと思わないか、」
手をわきわきと動かしながら声も高らかに術衣を身に纏つた男、ヴィクトール＝フォン＝フランケ
ンシユタインは、十四代目葛葉ライドウを前にして幾度目かの誘いをかけた。

かけられた方はまたかとはかりにつんざりとした様子を隠そうともしないまま、頭を横に振つた。

「思わない。……いいからさっさと仲魔を回復してくれ。人工生命体の話は、あの胡散臭い露西亜

人を連想するから厭なんだ」

「ふむ、気の短いことだ。止むを得ん、此の話はまた後日」

「だから興味が無いって、……聞けよ人の話」

少年のにべもない拒絶の科白を全く聞いていないに等しい返答を口にした彼は、背後で肩を落し力無く呟く少年の様子など目にも入れず。しかし其の要求を叶えるため自らが開発した巨大な機構へと歩を進めた。

慣れたやりとりとはいえ、流石に毎回交わすとなると疲れるな とややへたれてしまったもみあげの角度を直しながら、少年は目の前に聳える巨大な機械機構を見上げ、幾度思ったか知れぬ疑問を抱いた。

それにしても、これってどれ位の電気量で動くんだろう。

【了】

【注】

本編に於いては大正九年八月以降八年間用いられていた編制を参考としました。

・ルイジ＝カルヴァーニ……

一七八〇年、カエルの脚の筋肉の神経に二種類の金属を当てると、生きているかのように動くことを発見し、電気化学発展のきっかけを作った医学者であり、物理学者。尤も、彼自身が考えた生物の中に電気があるという考えは誤りで、これは電解液の中に異種の金属を入れることによって生じる電位差の働きによるものである。

・『人体の電気についての研究書』、『電気についての書簡』…

一七四六年、一七五三年に作成された、静電気の人体実験の報告及び書簡集。

・『ガルヴァニスムについての理論及び実験の小論』…

一八〇四年に作成された、動物や人間への電気的作用の実験報告。

・猫の額に鯉印…

好物をそばに置いたのでは油断がならないことの例え。過ちをおこしやすい、危険な状況であること。